
漫透世界のデリット

夕闇終夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漫透世界のデリット

【Zコード】

Z8826Y

【作者名】

夕闇終夜

【あらすじ】

世界はエルドの大樹によって支えられ、魔物が徘徊していた。エルドの大樹によって育てられた少年、アルト・クラッシュード。彼は『勇者』、『魔王』、『魔族』、『人間』と出会い、『呪われた右目』で一体何を見、何を感じるのか。そして、何を護るのか。

「プロローグ」

「・・・」

エルドと呼ばれる大樹の側。

ソコに、1人の少年が座り込んでいた。

エルドはその少年を見る。

エルド、と呼ばれる樹は代々世界中から崇められる世界樹だ。

この世にたつた一本しかない、世界を支える樹。

そして全ての精霊を司る象徴でもあり、別名、『精霊王エルド』と呼ばれている。

エルドは人間達を護る精霊だ。

人間を何年も見ている。

そして、その少年は左目が青いのに対し、右目の色は、血の様な真紅だった。

エルドは瞬時に理解する。少年は人間の國を追放されたのだと。何故、理解したのかは記憶を詠んだりなんだりして判った事だが・。

一番の理由は、その赤い右目が関与していた。

きっと、その右目が原因で追放されたのだろう。

少年は、人間の年齢にして6歳程度だろう。きっと、自分が置かれている状況も判らないだろう。

少年は無表情のまま、エルドを見上げた。

悲しそうに表情を歪ませる。

エルドは人間の姿になる。

本体は勿論、樹だが。

エルドは少しだけ微笑んで、少年に言つ。

「君の名は?」

「・・・アルト。アルト・クレッショード」

「おいで。僕がキミを護ろう。アルト・クレッショード君。僕の名は、エルド。よろしくね」

エルドは出来るだけ優しい微笑を少年に。
少年は無表情のまま、エルドを見上げる。

「アルト。おはよつ」

「・・・朝つぱらから人間になつてんじやねえよ・・・。魔力とか、最近失つてきてんだろうが・・・」

半分寝ぼけながら、黒髪の少年は答えた。

森の奥深く。

エルドと呼ばれる大樹の直ぐ側。

木造で出来た小屋に、1人の少年が住んでいた。

少年の名は、アルト・クラッショード。

エルドの森で暮らす者で、年齢は16だ。

アルトはベッドから起き上がり、あぐいをしながら手洗い場までフラフラと歩いていく。

蛇口をひねると肌には調度いいと思う程度の冷水が流れ出た。

「・・・フワア・・・」

大きくあぐいをして、アルトは顔を洗うと台所まで歩いた。

「エルド。何か食べたい物とかあるか？」

「・・・僕は精霊なんだけどねえ」

エルドと呼ばれた緑色の髪にエメラルド・グリーンの瞳をした青年は、苦笑しながら木製の椅子に座っていた。

青年はエルドと呼ばれた世界樹の人間の姿である。

「じゃあ、パンとコーヒーを貰おうかな」

「本当にそんなんで満足なのかよ・・・」

「僕は精霊だよ？本当は何も食べなくても生きていけるんだ」

エルドのそんな言い分を無視したアルトは、彼の前に食パンとコーヒーを置く。

コーヒーを呷るからは湯気が出ていた。

エルドは手を合わせ、「いただきます」と言つと食パンを少しだけかじる。

アルトも向かい側に座ると自分の分のパンをかじつた。

「そういえば。魔術の勉強は進んでる？」

「まーな。大体の事は習得できたつもりだけど

「そつか」

「コイツと喋っている時、唐突に会話が途切れる事がある。

アルトは溜息を吐いて、エルドの顔をつかがつた。

本人は魔力を失いつつあり、大分身体も衰退と衰弱を始めていると言つていたが、とてもそんな風には思えないほど普段と変わらない表情をしている。

「剣の修行もしないといけねえなあ。最近、魔物が増えてきてるら

しいし。・・・ひつうか、いつまで人間の姿になつてんだよ。お前今、魔力の使いすぎつて寿命を縮ませる行為にも等しいんだが」

「・・・まあね」

「・・・だつたら早く本体に戻れよ」

「そうだね。・・・心配してくれてるの?」

「なわけねえだろ」「

フイックと顔を背けるとエルドはクスクスと笑った。

「・・・最近、魔物が多くなつてきているな」

「・・・魔王の出現、も、大きく関係しているんでしょうね」

フレイア王国、フレイア王宮内。

貴族の様な服装をした長身の男がもう一人の、一見どこかの戦士の様な姿の女性と廊下を歩きながら会話する。

「・・・全く、迷惑極まりないな。魔王なんつうのは」

「全くです」

「そういうやあ、アイツはどうした?えーっと、なんつったか・・・」

「ああ、あの《勇者》の血筋を受け継いだ・・・」

「そうだ。近々、エルドの樹を訪れるそうだ・・・。だが最近、エルド周辺は魔物が手ごわく多いらしいから誰も近づけないんだがな」

「・・・何をしたいくんでしょう。あんな、魔物が居るだけの森に」

男は少し考えるそぶりをし、たつた一つの仮説を見出す。

「もしかしたら、エルドの加護、かもしけんな」

「エルドの加護、ですか」

「ああ。・・・まあ、『精霊王エルド』の加護は、不可欠になつて
くるだらうしな」

「・・・噂をすれば」

女性は後ろを振り向き、背後に立つていた青い髪に青い眼の若い優
男を見て微笑んだ。

「エルドの森に、何しに行く気なの?」

「・・・さつきそこの男が言つたとおりだ。・・・『精霊王エルド』
との契約、及び加護を受けに行く」

そうこうと男は女性の隣を通り過ぎていった。

1 1 「精靈王エルドの樹」

エルドの樹。

別名は『精靈王エルド』。

全ての精靈達を守り、世界を支える大樹だと言われ、加護を受けたものは唯一、エルドの側に行く事を許される。ただ、例外が居るトスレバ。

それはエルドに育てられた者だけだろつ。

「・・・？」

胸がざわつく感覚を感じ、エルドは顔を上げる。

それは小屋でアルトの魔術の勉強をしていた時だつた。この感覚は、誰かが、森の中に入ってきた・・・？人間みたいだけど・・・相当な魔力の持ち主だ・・・。

「アルト。森の中に誰かが・・・」

「・・・どんな奴かわかるか？」

「相当な魔力の持ち主だよ。魔族じゃないみたいだけど。うーん・・。なんていえばいいんだろつ」

「お前が曖昧な言葉を返すなんて珍しいな・・・。見てくるよ。どうせ本体にも会いに行こうとか思つてたし」

「じゃあ、頼むよ

アルトは小屋を後にし、エルドは少しだけ微笑む。エルド

はうすうす感じていた。

あの魔力の持ち主が、一体何者なのかを。

きつとその魔力の持ち主が、アルト・クレッショードといふ忌み嫌われる右目を持つ者の運命を深く変えてしまつ」とさえも。

それは、きつと悪くも、良くも。

エルドは本体に戻るために、魔力を戻した。

「・・・・ツハアア・・・・」

まだ早朝のせいか、空気が肌寒いくらいだった。
身震いし、息が白く吐かれている。

(厚着にマントを羽織ってでももうこんなに寒いのか。・・・太陽
は当たつていいようだけど、いつも寒いと、そら弱るわな)

白い息を吐きながら、森の中を進んでゆく。

すると奥に進めば進むほど何かの光が強くなつていった。
ザワザワと、耳元で何かの音が鳴る。

精霊たちが、アルトが森の中へ入つてくるのを楽しみにしていたよ
うに空気が振動し、その感情がアルトの中へ伝わってきた。

少し、ピコピリした空気を感じる・・・？

それにも・・・誰だよ、こんな寒い日に森の中へはいつて来る奴は。

エルドの魔力も弱つちまつてゐし。できるなら無理しないで欲しいんだけど。

そこまで考えてアルトは一度止まる。

・・・俺、エルドの事、心配してんのか・・・?
まあ、エルドは俺の育て親だし。心配しない方が可笑しいんだけど。
・・・何だか今日は調子が狂うな・・・。

するとフワフワと赤い粒子が舞い始めた。

少しずつ体温が高まっていく。どうやら火の精靈が温度を上げてくれているらしい。

これならエルドも少しばかり魔力を温存できるだろつな。

・・・まだ。エルドの事、心配しすぎなんじやねえか?仮にもアイツは精靈王なんだ・・・。

ザワツアア

「・・・エルド」

顔を上げると、エルドと呼ばれる精靈の大樹が光子を纏つていた。光合成でも・・・いや、世界樹だと言つほどなのだから、魔力を補充でもしているのだろうか。

アルトはエルドの幹に手を添えた。
眼を瞑り、魔力を集中させる。

「・・・

呪文の様な何かを呴くと、エルドは風もないのに葉を揺らした。

（これで魔力の足しになればいいんだけど。俺だけの魔力じゃ足りないだろうな）

本人曰く、相当衰弱しているのだというらしいし。

・・・全く、そんな衰弱しているなら俺の前で人の姿をしなくてもいいのに。

ガサツ・・・

「・・・・・誰だ」

音の鳴つた方向へ、魔力を集中させる。

木の背後から現れたのは、長身の青い髪をした男だった。
腰には剣が携えられている。

驚いたようにこちらを見て、再び一步、前に歩んだ。

「・・・・誰だと聞いてるんだが」

「・・・俺は、『勇者』の血を受け継いだ者だ。・・・お前、エルドに近づけるのか？」

アルトは「は？」という顔になる。近付くくらいでどうなるのだ。
・・・でも、前にエルドは自分のみを護るために見知らぬ者は入れぬようにしているとか言ってたような。

(「どうか、今、コイツは《勇者》とか言つたか?」)

男をジツと見て、魔族ではないのを改めて確認した。
ただの人間でないことも理解した。何となくだけれど。

「お前、エルドに近づけないのか? 魔族とかモンスターじゃないのに? 人間なのにか?」

「エルドの樹に近づけるのはエルドの加護を受けたものと……。エルドの使い魔、精霊、そしてエルドの守護者だけのはずだ。……お前何者だ?」

逆に「何者だ」、と言われ、癪に障つたが何とか押さえ込む。
お前が何者だよ。勇者とか言われて納得できねえのはコッチのはずなのに。

「……俺はアルト・クラッシュワード。このエルドの森に住んでる。
……まあ、エルドとは《知り合い》だ」

《知り合い》という言葉に男は顔をゆがめたが、それ以上何も聞かなかつた。

聞いても自分には関係ないと判断したからなのだろうか。

「俺は……魔族と戦うため『精霊王エルド』の加護を受けに来た。
必要不可欠な事だからな」

「……俺に頼んでもエルドは返事してくんねえぞ。……おい、
エルド」

アルトはエルドの樹の方向を見て、エルドの名前を呼んだ。
エルドは返事をせず、揺ら揺らと大樹を揺らす。

ザワア・・・ア・・・

「・・・いいつてよ。ホラ、右手を差し出せ」

「・・・お前、エルドと会話できるのか?」

「エルドだけじゃない。他の精霊とも会話程度なら出れる」

「・・・」

「ホラ、早くしねえとエルドの奴、疲れて寝ちまつぞ」

そういわれて男は右手を差し出した。

エルドの大樹が一層輝きを増す。

そして同時に男の右手も輝き、次第にその光は収まっていった。

エルドを見上げると、エルドは疲れたというように輝きが薄まっていく。

「これで大樹に近づけるらしい。・・・って待て。俺はそんなもん貰つてねえぞ・・・・・俺は特別?ふうん・・・」

アルトは男を見る。

男は右手を見て、アルトのほうを向いた。

「せついや、お前勇者とか名乗ったけど。それ、称号だろ?が。名前は?」

「・・・俺の名は、クロウ・ファインダー。『勇者の末裔』だ」「クロウ?・・・ふうん・・・。そうだ。魔物。最近ココラ辺で厄介な奴が出たらしいんだ。気をつけたほうがいい。ホレ」

「？」

アルトが投げた子袋を、クロウは受け止める。その子袋を開けると中には葉が数枚、入っていた。

「何だ？」

「エルドの魔力で育つた樹の葉だ。流石にエルドから魔力を奪う行為はできねえからな」

「・・・礼を言ひつ」

「硬いなあ」

「？」

「そんなかたつくるしいと、ココリ辺の精靈も警戒すんのも無理ねえな」

クロウに笑いかける。

さつきから精靈が何だかピリピリしていたのはコイツのせいだったらしい。

ザワザワと、大樹が揺れた気がしたが錯覚だったようだ。

無言でクロウはその子袋を握り締め、後ろを振り向いた。

「じゃーなー。クロウ」

「・・・ああ」

クロウが去った後、アルトは再びエルドの大樹を見上げた。エルドから、声が降りかかる。

『アルト。良かつたね』

「・・・? 何が?」

『もう直ぐわかるよ』

「・・・?」

エルドは嬉しそうにクスクスと、大樹を揺らした。
アルトは、溜息を吐いてエルドの側に腰を下ろした。

「・・・帰つてきたか」

クロウは先ほどエルドの大樹の側で出会った少年、アルトと呼ばれる少年から貰つた子袋を握り締め、目の前で王座に座る男を見上げた。

王座に座るのは、この国、フレイア王国の王であるシエル・レイブである。

彼は優しい微笑を見せ、クレイに喋りかけた。

「どうだ? エルドの加護は」

「・・・」

「クロウ?」

「・・・スマセン。少し考え方をしていまして」

「ところで、クロウよ。仲間はどうする? ロチラで派遣を

「

「いえ、それなら問題ありません

「?」

「既に

決めました」

クロウは自分でも何が可笑しいのか判らないが、微笑を浮かべた。
その微笑は、優しげなものだった。

「支障は起きないでしょ。一目見て、魔力は常人以上だと判りました。・・・それに」

それに。

クロウは笑う。

一目見て、判つた。

剣術の腕も申し分はない。魔力も桁外れである事も。
それ以上に、面白い、気に入つたという感情の方が大きかつたけれども。

「戦力にも、申し分はない。いえ、それ以上に、でしょう
「・・・そうか。なら任せよう」
「・・・では、失礼しました」

王室を後にし、クロウはフレイア王宮内をウロウロする。
すると目の前に1人の男が立っていた。彼の名はレイラという。
年はクロウより上だ。

実を言うとあまりクロウはこの男の事を好いていない。
時折殴り合いの喧嘩に発展する事も数少なくない。
そのたびに他の者に迷惑をかけてしまつていた。

「・・・何の用だ？」
「・・・新しく人員を雇うそうじやないか
「・・・まあな」
「ソイツ、強いのか？」
「判らないな。それは」
「判らない？何でそんな奴を雇うつもりなんだ？」

「人並みはずれた魔力は確かに感じたが……。実際戦っているところを見たわけでもないしな。……それに、本人にも雇うとは言つていない」

「……オイオイ、どうするつもりだよ」

「無理矢理にでも引き入れる」

「……嫌われるぞ？」

「構わない」

「……そんなんだからお前は……」

男は呆れたように言つたが、クロウは楽しそうにまた笑つた。

1 1 「精靈王エルドの樹」（後書き）

これからよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8826y/>

漫透世界のデリット

2011年11月27日12時59分発行